

新九郎通信



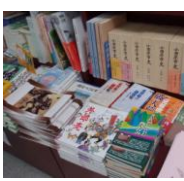


発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

もう 2 月? 今年のスタートはことのほか早く過ぎた気がします。新年早々旅行に行ったせいかまだ夢心地が続いているからだろうか。早くも小田原梅まつりが始まり、寒さの中にも春はそこまで近づいています。受験生のいるご家庭ではあと一息、早く本当の春が来るといいですね。2月の新九郎は 若い作家さんの展示が続きます。

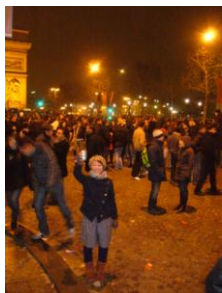
新九郎 2月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 2/9(金)-14(日) 第12回怪作展	小田原高校 0B による展覧会 今回は 16 人参加。絵画・彫刻・立体・金工・映像・写真・友禅染め・イラスト etc
 2/16(水)-21(月) I♡小田原 T シャツ展	小田原ジャンクション (9 人のイラストレーターのグループ) 昨年は小田原井展で加藤市長にも気に入られ、食の祭典でも展覧会開催。
 2/18(金) 新九郎デッサン会	18:15~20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500 円
 2/23(水)-28(月) 第9回神奈川の自費出版フェア	本づくりを楽しむ! 自費出版本・地域本フェア 講演会 2/26(土) 14~15 時 「電子書籍と紙の本・読書のこれから」 講演会 2/26(土) 15:15~16:15 「伝えたい! 満洲の戦争孤児の叫び!」 自費出版相談会 2/26(土) 16:20

会期・展覧会名	会場
~2/7(月) 新春富嶽展	お堀端画廊 0465-23-7819
2/2(水)~28(月) 大塚ヒロ子山水スケッチ展	はげ八鯨 火休 0465-22-0945
2/9(水)~13(日) ぐるうぶ碧・ちゃりてい展	飛鳥画廊 0465-24-2411
2/25(金)~27(日) 宗雲展 転生のいけばな	飛鳥画廊 0465-24-2411
2/18(金)~2/23(水) 第10回ななくさ会作品展	小田原 EPO 5 階ホール 0465-23-7711
2/5(土)~13(日) 山崎優絵画展	大井町立中央公民館 0465-83-5409
2/15(火)~3/3(木) 土日月・休 飯室哲也展	旧片浦中学校 0465-29-0134
1/29(土)~2/10(木) 徳沢隆枝展	すどう美術館 0465-36-0740
2/12(土)~3/6(日) マルティン・ファウゼン展	すどう美術館 0465-36-0740
2/13(日)~20(日) 南足柄美術協会新春展	女性センター(大雄山駅前) 0465-74-0772
1/23(日)~2/13(日) 石川栄二写真展	元麻布ギャラリー茅ヶ崎 0467-88-1596 水木・休
2/1(火)~27(日) 伊東正明陶芸展	寄 荷風(松田) 0465-88-3021
2/4(金)18:30~ 文化サロン「岡信孝氏講演」	喫茶館・銀の椅子 0465-23-4600

パリだより 横井山泰



2011年は地下鉄で迎えた。エッフェル塔を正面に臨む、シャイヨー宮のカウントダウンに出掛けたのだが、同じ目的の人々で超満員のメトロは、何度も止まり、新年となった。「ボナネ!!」普段は酔っ払いを見かけない町も、この日だけは、シャンパンをラッパ飲みする姿で溢れていた。飲み終わったビンを地面に叩き付けて祝うのだが、見るたびに冷や冷やした。エッフェル塔を眺めた後は、凱旋門へ移動した。こちらでは「誰彼構わずキスをする」という。キスはされなかったけれど、歩行者天国になったシャンゼリーゼを、ビール片手に歩くのは気分がよかった。クリスマスは家族と過ごし、新年は友達と騒ぐ。厳かになる瞬間が日本とは逆のようだ。あまり知られていない名所に、カタコンベがある。パリの地下には全長 500 km の地下道(採石跡)があり、その一部に初期キリスト教徒の遺骨が、600 万體埋葬されている。螺旋階段を下り狭い通路を進むと、堆く積まれた骨の空間が広がる。気味悪さよりも、その量に驚く。学校ではモデルを描いている。ルノワールの裸婦そのままのモデルさんもいて、それにも驚く。



ようこそ平塚美術館

平塚美術館学芸員 勝山 滋



春の所蔵品展は 8 作家 49 点を展示しています。椿貞雄「菊子坐像」はそのうちの一点です。岸田劉生に心酔し、鶴沼の劉生宅近くに移居した時期の作品で、劉生における麗子像といえるが、いまと違い暖房のない正月に、妹の娘である菊子の厚着した姿には画家の愛情が感じられます。この温かさは劉生作品にない特長といえます。幼い菊子にはお菓子などを与え、綿密に写生することを心掛けたようで、二週間足らずで完成したといえます。当時椿は 26 才、西洋由来の油絵技法を用いて日本人の心を描く理想をよく表しています。

正月早々 夫と二人フランスに行ってきた。私たちにとってフランスは、大げさにいえば憧れの地。憧れの美術館で名画をたっぶり観てこようという旅行だった。羽田発着のJAL便は人気があるらしくキャンセル待ちで運良くとれたため、当初より3日早まった出発で未年始めは慌ただしかった。新春版画展の準備 トランクを宅配に頼み、美術館パスポートの手配 娘たちに頼まれたお土産を整えたりと、遊びに行くにも準備は大変なことである。ヨーロッパを襲う寒波情報に用心し、大量のカイロとブーツには中敷まで敷くという念の入れようで、夜中に羽田を出発した。フランスの正午が日本の午後8時という時差で、私達は翌朝6時半バリドゴール空港に到着した。

バスにトランクを積み込み4つの世界遺産を巡る気楽なツアーの1日目は、バリから高速道路を南へ2時間半、ゴシック建築の最高峰シャルトル大聖堂に向かった。8時半になってはまだヘッドライトをつけたおなじみの高級車達で高速はラッシュが続いていた。パナソニック カシオ TOSHIBA 馴染みの文字が目に入る。9時。ようやくあたりが明るくなると町の景色に目を奪われた。やはり洒落ている。町全体はオークトーン、建物は歴史を感じるものばかりだが けばけばしさや景観を遮るものが無く落ち着いていた。いよいよ町中に入る。どこの景色にもカメラを向けたくなるほど素敵な街並みだ。道は石畳。石づくりの家並みは安野光雅の「旅の本」の世界だった。

1979年世界文化遺産になったシャルトル



大聖堂は、外観は修復工事中であったが全体の姿が実に美しく途中から降り出した雨の中に立つ姿は気高さを感じられた。一歩足を踏み入れると太陽が昇る方向の正面祭壇から十字架の光が差し込み異次元の世界が広がっていた。全堂の窓を埋める176のステンドグラス、400体の彫刻にも圧倒された。壁を飾るステンドグラスには5000人の人物が描かれているのだという。キリスト誕生南のバラ窓 キリストを抱くマリアの像など細かなステンドグラスの美しさ、特に際立つ鮮やかなブルーが心を落ち着かせてくれた。教会の中でも最も重要とされる大聖堂は、文盲の多い12Cにあって目で見る聖書としてミサに訪れた人々の心をとらえて離さなかったに違いない。私は記念にブルーのエナメルが塗られた小さなロザリオを買った。

フランスでの初の食事は、一般人でにぎわう普通の郊外のレストランだった。「ボンジュール」店に入ると笑顔で声をかけてくれる。私も「ボンジュール」である。昼時で店は大盛況だ。中央の料理のコーナーを大きな男性達が行ったり来たりして料理を運んでいる。どうやら食べ放題のようだ。飲物の注文で驚いた。グラスワインは2ユーロ水が4ユーロだ。迷わずピッチャーのワイン5ユーロを頼み 籠のパンを食べる。パンのおいしさはさすがだ。38人のツアー客にもかかわらず アツアツのスープが運ばれたのはご馳走に感じた。たっぶりの緑色のスープは初めての味だった。食材を聞きそびれたのが今も惜しい。パテに続きローストした鳥ももとフライドポテト、最後は林檎のタルトとフルーツが籠で運ばれてきた。リンゴに洋梨、オレンジなどが山盛り籠に盛られそれぞれがナイフでむいて食べるらしい。セザンヌの絵に出てくる小ぶりのリンゴだ。日本の店頭では売り物にさ

れない大きさが味は濃い。オレンジも洋梨も小ぶりながら鮮度と味は申し分なかった。食は文化。初めての食事はフランスを知る良いきっかけのランチとなった。

午後は今も140の古城が点在するという美しいロアール地方での古城めぐりだ。バスで1時間半。ロアールに向かう道は見事な牧草地帯の連続だった。どこまでも続く牧草地帯。フランスが農業大国であることを改めて実感する。フランスの面積は日本の1.5倍と言うがそのほとんどが平野。米どころの庄内平野だってこんなに田圃は続かない。冬枯れているとはいえ土地は手入れされ点在する農家も絵本の世界のような集落だ。ブドウ畑も今はひっそりとしていたが ロアール地方の白ワインは是非試してみたいと楽しみが増えた。バター チーズ 肉 ワイン 野菜 果物 硬質ながら良い水にも恵まれたフランスには世界三大料理が生まれる土壌がしっかり根付いていたのだと実感した。

ロアール地方

を流れるロアール川は1020km。日本最長の信濃川の約3倍の長さでロアール盆地をうるおし大西洋まで流れている。その支流を城の敷地に敷き引きこみ、自然を楽しみ 狩りを楽しみ 愛人と楽しむ権力の象徴ともいえる古城には、長いフランスの歴史が刻まれていた。最初に訪ねたのはシャンボール城だ。1531年フランソワ1世が建てたとされる14の城館のうち唯一国王が若い伯爵夫人の為に建てたと言われる城だ。部屋数446、煙突の数365 二重のらせん階段はレオナルド・ダビンチの設計だ。同じ城でも小田原城とは規模が違った。庭というより森のような庭には鹿やうさぎが住み庭にはロアールの支流を人工的に流し、酒匂川が庭にあると言ったスケールに、みただけで圧倒されてしまった。設計にはイタリアからレオナルド・ダビンチを連れてきて関わったといい、その時のお土産の作品がルーブルにあるのだという。パリのベルサイユ宮殿に匹敵するくらい城であったらしい。私達は写真撮影を済ませ広大な土地を貴族の気分歩いた。しかし気になるのはこの城の管理。こうした歴史の産物は 国が保護しているにしても大変ことなのだろうという現実も見え隠れして貴族には成りきれない貧乏性が頭をもたげた。



城の中の見学は 次に訪れたシュノンソー城でゆっくりとできた。シャンボール城に比べるとこじんまりしたシュノンソー城は、女性が建てた珍しい城だった。シュール川の橋の上に建てられたシュノンソー城には6人のお妃が共に暮らしていたという。市松模様の大大理石の敷き詰められた舞踏会のできそうな大広間から 6人の妃の個性あふれる装飾が活かされた寝室 暖炉のたかれた客間 美術を楽しむギャラリー 地下には立派な厨房も当時のまま残されていた。どの部屋にも壁一面の立派なタペストリーが掛かり、その大きな細かなコブラン織の美しさに当時の技術の高さを知ることができた。たぶん川遊びに興じているお妃を眺めたのであろう 窓辺には外を眺める素敵な窓も設けられ、外は美しい水をたたえた川 庭には迷路になった遊び心のある場所もあり 優雅な生活ぶりが伝わった。驚いたのは各部屋や廊下に飾られている花々だった。チューリップ、バラ、



菊、クリスマスの名残のニッキと林檎オレンジを飾ったかごなど いたるところに見事な生花が生けられていた。まだ日本では見られない真紅のチューリップの見事なこと。ここにもフランスの豊かな生活美をみた気がした。門からのアプローチの並木道もしっかり手入れされ春の芽吹きの際にはさぞ美しく城を飾ることだろう。撮影が自由にできるおかげで、こうして写真を観る度に 旅の思い出がよみがえるのもフランスの素敵なお土産だと有難い。あたりが薄暗くなってきた5時前、集合時間を思い出してお土産屋をのぞこうとどると店は既に鍵がかけられていた。5時半閉店というのは店のオジサンが帰る時間らしい。せっかく日本から来たのだから的な発想はフランスでは通じない。鍵を持って入り口に立ち、早くお帰り下さいとばかりにっこりしているおじさんには添乗員さんもあきれ顔だったが、お土産を買いそびれた無念さでちょっとテンションの下がった出来事だった。これもフランス流ということだ。

今日のホテルはトゥール。あのトゥール・ド・フランスで有名な所だ。ツアーでは色々な方と知り合いになれる良さがある。この日夕食で一緒した方たちは 母娘 小学生とママのカップルだった。東京、横浜、埼玉、静岡と近くの方が多かったが北海道から来たフランス好き熟年夫婦のほかお買物目当てのギャルや姉妹 料理を食べに来た若いシェフや 一人旅の若者や旅慣れた女性などがお仲間だった。小学3年生の男の子はパリは5回目といいつくりに寝ているママを置いて一人で朝食を食べにきたりと旅慣れた様子で既に英語も堪能だった。多感な子どもの頃からこうして異文化に触れる体験はやがてどんな形でかれの中で開花するのか またいつか出会ってみたいと感じるお子さんだった。

次号に続く

[1月の事]

パリの美術館を回ってきた。印象に残ったのは 美術館が広く市民特に子供、絵を愛する人たちに開かれているということだ。オランジュリー美術館では モネの睡蓮の目の前でイーゼルを立てて制作する女性がいた。セザンヌの絵の前にも模写する若者がいた。世界の名画の直前で、まるで自分のアトリエのように制作することができることに正直驚いた。美術館が生活に密着して居ることも実感した。



パリ市立美術館のバスティア展では親子連れが多く絵の前で親子が楽しそうに語り合い、日曜日の過ごし方として美術館がその場所になっている感じがした。親子は自由に見合い、子供が気に入った絵の前に座り込み集中して模写する姿も心に残った。ボンビドゥーでは学校が学習の一環として連れてきていた。幼児から中高生まで幅広い年代の子供たちが先生に連れられ、絵の前に座り、横になったりリラックスしながらも集中して説明に聞き入りノートに書き込んだりして楽しんでた。また 写真撮影などの制限のないのも驚きだった。フラッシュ禁止はあるがオルセー以外はすべて自由だ。日本と比べても意味がないが、どうしてこんなに違うのだろうかということをおき付けられた。文化の違いとかたづけてしまうのにはあまりに大きな差だ。「生活にアートを」新九郎は、身近な所からアートを楽しむ提案を続けている。ギャラリーに来て頂くこと 夏休みの親子美術館ツアーやアートめぐりなど、アートの楽しさをもっともって伝えていかなければと感じた事だった。杏